

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：32697
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2014～2017
 課題番号：26370051
 研究課題名(和文)「古インド・アーリヤ語歴史文法形態論」の作成

研究課題名(英文)Old Indo-Aryan historical morphology

研究代表者

後藤 敏文 (Goto, Toshifumi)

国際仏教学大学院大学・その他の研究科・教授

研究者番号：40215497

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：古インド・アーリヤ語(広義の「サンスクリット語」)の語形を語根、語幹、接尾辞、語尾などに分節し、活用組織とその具体的語形、語形成の原理と機能を正確に分析把握する。古イラン諸語との比較を通じてインド・イラン祖語形を復元し、さらに、インド・ヨーロッパ祖語からの展開次第を跡づけて形成原理を検証の上、歴史文法の観点から古インド・アーリヤ語形態論を著す。以上を目的とした。当初の計画の中、名詞部分については作業を完了した。動詞部分についてはより徹底した記述を目指し、改めてカテゴリーの厳密化、用語の再定義などの作業からはじめ、今後の課題として計画を立てた。現在遂行中である。

研究成果の概要(英文)：The project aims to write a historical morphology of Old Indo-Aryan. The attested forms are segmented to root, stem, suffix and ending; paradigm and motivation (logic) for the formations are analyzed and described. These data are compared with the formations of Old Iranian languages so that the Proto-Indo-Iranian forms are reconstructed. Then I try to pursue the morphological developments historically from Proto-Indo-European through Proto-Indo-Iranian to Old Indo-Aryan. The plan was accomplished in the chapters for general explanations (terminology, text layers, etc.), nouns, numerals, and pronouns. I could not finish the chapters on the verbs, because the necessity of making up a more thoroughgoing scheme and detailed description became clear for the verbal grammar, which is the central field of my research. I am now working on the morphology of the verbs.

研究分野：インド学，インドヨーロッパ語比較言語学

キーワード：古インド・アーリヤ語 サンスクリット インド・ヨーロッパ語比較言語学 ヴェーダ アヴェスタ
 歴史文法

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は古インド・アーリヤ語 (広義の「サンスクリット語」) の形態論について、信頼できる歴史的分析和記述とを目指した。

(2) 文献研究がインド学の基盤をなす。そのためには信頼できる文法書の手引きが欠かせない。古インド・アーリヤ語 (サンスクリット語) 文法の理解には、歴史的展開を辿る歴史文法の果たす役割が大きい。古インド・アーリヤ語文献を学術的に検討する場合、Wackernagel が始めた *Altindische Grammatik*, 必要に応じて Macdonell, *Vedic Grammar* (1910), Whitney, *A Sanskrit Grammar* (第2版 1889), Renou, *Grammaire sanscrite* (第2版 1930) などを用い、さらに Delbrück, *Altindische Syntax* (1888) の助けを借りるのが普通である。いずれも 19 世紀末から 20 世紀前半までの理解を反映するものであり、新たな知見を総合する文法書が求められている。その後の研究の進展は、特に、動詞の個々のカテゴリーに関する研究とインド・ヨーロッパ語比較文法全般の発展に負うところが大きい。

(3) Wackernagel-Debrunner, *Altindische Grammatik* は古インド・アーリヤ語 (サンスクリット語) に関する唯一の本格的学術文法といえるが、1896~1964 年に音韻、名詞活用、名詞派生法までの部分が出版されたのみである。第4巻には動詞篇が予定され、Karl Hoffmann が担当したが果たせず、その後、本申請者が引き継いだまま未完となっている。動詞文法の完成には実際に文献に現れる語形を網羅した資料集が欠かせず、ホフマン教授が始めた資料集作成の作業を後藤が DFG (ドイツ学術振興会) プロジェクトに雇用されて引き継ぎ、一部、29 語根については帰国後、1990 年から 1997 年に懸けて国立民族学博物館研究紀要に発表した。『リグヴェーダ』から古典期に至る文献を精査し、諸動詞語形、第一次派生名詞語形

などを網羅し、必要に応じて注解を加えたものである。未出版の語根についても 13 冊の厚いファイルに資料を集めてある。(これを本研究計画の中で、2017 年度に全て PDF 化し、利用に備えた。)

(4) 申請者は、大阪大学、東北大学、国際仏教学大学院大学における長年のヴェーダ語、古典サンスクリット、叙事詩サンスクリット、パーリ語、さらに、アヴェスタを始めとする古イラン語文献の授業、自分自身の研究遂行 (主に、科学研究費助成金による「リグヴェーダ翻訳研究」2007-2010、「『業と輪廻』理論成立史に関する原典研究」2011-2013) の過程において、また、近年内外の研究論文に触れるにつけて、現在の研究水準に立つ信頼できる簡明な歴史文法の必要を痛感してきた。このような折、偶々ウィーンのアカデミーの申し出を受け、*Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background* を英文で急ぎまとめた。2009~2010 年に原稿を完成し、2013 年末に出版を見た。インド学と隣接分野においては我が邦の研究者の数と質とが増しており、将来重要な役割を担うことが期待されるため、日本語で用語を確定しながら、最先端の知見を網羅し解説した歴史文法を著すべき時機にあるものと判断し、重要な語形を網羅し、適切な分析と解説とを施した歴史文法を日本語で作成することを計画するに至った。

(5) インド・イラン共通時代に遡る姿は、Hoffmann-Forsman, *Avestische Laut- und Formenlehre* (1996, 第2版 2004), インド・ヨーロッパ祖語からの展開については Rix, *Historische Grammatik des Griechischen* (1976, 第2版 1992) を参考に用いることができるが、古インド・アーリヤ語の各現象を歴史的に解説する著述が必要である。

(6) 名詞文法については、上に言及した文献によって比較的信頼のできる情報が得られ

るが、語形成、活用の背後にある原理の抽出と提示とが求められる。動詞については、信頼に足る網羅的な既述が無く、研究の個々の進展を迫る必要がある。動詞は表明の中核を担う部分であり、その精密な理解は文献研究に重要である。Hoffmann, *Der Injunktiv im Veda* (1967 出版, 1950 完成) は『リグヴェーダ』という文献そのものについての理解を一新したばかりでなく、古インド・アーリヤ語、インド・イラン祖語、インド・ヨーロッパ祖語に亘る動詞研究にとって座標軸の転換を意味した。その後、Narten, *Die sigmatischen Aoriste* (1964), Gotō, *Die "I. Präsensklasse" im Vedischen* (1987, 第2版 1996), Schaefer, *Das Intensivum* (1994), Kümmel, *Das Perfekt* (2000), Kulikov, *The Vedic -ya- presents* (2012) など、基準とするに足る研究が出版された。その他、causative に Jamison (1983), 『リグヴェーダ』の Konunktiv と Optativ に Meier-Brügger, imperative に Baum (2006), desiderative に Heenen (2006) の研究などがある。また、上記のごとく、申請者の語形一覧資料が動詞文法を著す際の基礎資料となっている。

2. 研究の目的

(1) 本研究は古インド・アーリヤ語（広義の「サンスクリット語」）の語形を以下の3点を中心に分析し、歴史文法の観点から古インド・アーリヤ語形態論を著すことを目的とした。

① 語根、語幹、接尾辞、語尾などに分節し、活用の組織と具体的語形、語形成の原理と機能を正確に分析把握する。

② 古イラン諸語における言語事実との比較を通じてインド・イラン祖語における形態論を復元する。

③ インド・ヨーロッパ祖語からの展開次第が跡づけられる要素について、今日までに達成された知見を総動員して、形成原理を検証する。

(2) さらに、インド・ヨーロッパ語比較言語学、古イラン諸語文法、古インド・アーリヤ語文法の分野に、今日的水準に立った入門書、概説書が欠けているという認識から、語形や活用に留まらず、音韻論、統語論、語彙、概念の確認、文献の性格理解などに亘る正確な情報を加え、広い入門書の完成を目指した。

(3) 古インド・アーリヤ語の形態論を取り扱う際、音韻論の諸成果を無視することができない。1. の (2)–(3) に挙げた基本的文法書にはもはや利用に向かない部分が多い。インド・ヨーロッパ祖語における3つの喉頭音「ラリンジャル」とそれが各段階に残した痕跡、アップラウトの原理と構造、音節構造とその実現法則、サンディ、「ヴリッディ」派生法などについて、説得力のある明快な記述を加える。これによって、古インド・アーリヤ語の構造理解が一層容易になる。

3. 研究の方法

(1) 2013 年末に出版された *Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background* の構成を下敷きとして、概説部、名詞、代名詞、数詞、動詞、副詞の各章を順次作成する。初年度（平成 26 年度）は、活用の原理、形態論理解に必要な音韻論 (historical phonology)、術語解説、名詞活用の前半部を完成させることを目指した。平成 27 年度までに名詞、代名詞、数詞について作業を完成し、平成 28 年度中に動詞を扱って、副詞・不変化詞を除く主要部分の作業を終え、最終年度（平成 29 年）に、副詞その他を簡潔にまとめ、全体の検討整備、術語語彙集、索引の作成に至る予定であった。

(2) 形態論全般に亘って、最近注目されるに至ったアクセントと語を形成する諸要素のアップラウト階梯に関わる活用タイプの分類を各カテゴリーに一貫して用い、本研究の一特色とする。1 単語 1 アクセントの原則によって「アップラウト」という現象が起きた

(インド・ヨーロッパ祖語以前)の時点において、どの音節にアクセント付きの *e* 母音が残されるかという選択を中心に複数の活用タイプが生じたものである。これを含めて、基礎概念、術語の整理と定義解説に意を注ぐ。インド・ヨーロッパ祖語から古インド・アーリヤ語への音韻変化を概説する必要がある、特に、インド・ヨーロッパ祖語に想定される3つの喉頭音「ラリンジャル」と、これと関連する音韻変化に触れて解説する。

(3) 名詞(実体詞、形容詞)の活用とその原理を、幹母音語幹、非幹母音語幹に分けて分析解説する。接尾辞と活用タイプの機能分析に力を注ぐ。名詞複合語について、インド伝統文法学の用語にも触れて吟味する。

(4) 代名詞(人称代名詞、指示代名詞、疑問および不定代名詞、関係代名詞、所有代名詞)、所有形容詞、再帰表現の諸相、代名詞活用をとる形容詞を扱う。次いで、数詞と数詞派生語: 基数、序数、分数、数詞的形容詞・副詞を扱う。

(5) 動詞の諸カテゴリー概説: 能動と中・受動相、生起態(Aktionsart)、動作様態(Verhaltensart)、統語様態(Rektionsart: 自動詞・他動詞等)、アスペクト(「観」); アスペクト語幹; 語尾(一次、二次、完了、命令; 古インド・アーリヤ語語尾系列、インド・イラン祖語における語尾系列、インド・ヨーロッパ祖語に復元される語尾組織); 法(モード: 直説法、現在語幹過去、injunktive [基礎法]、接続法、可能願望法、命令法); 現在組織(伝統文法学の10分類を語幹形成原理に従って修正の上再構成); アオリスト組織とその形成原理; 完了組織; 二次的現在語幹(未来語幹、願望語幹、反復語幹; 使役語幹; 受け身語幹、名詞起源語幹など)。不定詞、分詞をはじめとする動詞派生語形の種類、検討、整理。(動詞篇については後述のように、さらに精密化を目指して、次の研究課題とした。副詞、不変化詞、諸索

引、参考文献一覧などについても同様。)

4. 研究成果

初期の計画の中、術語の定義確定、概説、名詞、代名詞、数詞の各章については完成原稿作成を終えた。日本語、日本における研究の段階、読者層などの背景から、英語による Old Indo-Aryan morphology and its Indo-Iranian background とは大いに異なる量、内容、記述となり、当初の想定より多くの時間が必要となった。今後、引き続き、動詞篇の完成に努め、所期の目的である歴史文法概説の出版に向けて着実に努力を重ねる所存である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 後藤敏文 「Svetāśvatara-Upaniṣad の言語について」 『国際仏教学大学院大学研究紀要』第21号、2017年3月、pp.45-90.

② 後藤敏文 「ヴェーダ散文文献に見られる Mārtāṇḍa 「死んだ卵の末裔」の物語」、『国際仏教学大学院大学研究紀要』第20号(2016) pp.21-47 (= 222-196) .

③ 後藤敏文 「インド・アーリヤ諸部族のインド進出を基に人類史を考える」、『国際哲学研究』3, 東洋大学国際哲学研究センター編, 2014, pp.43-57. 同ドイツ語版 “Hintergrund der indoarischen Einwanderung in Indien und die Menschengeschichte”, *Journal of International Philosophy*, No.3, 2014, pp.231-248.

[学会発表] (計4件)

① Toshifumi Gotō “Überlegungen über die Schöpfungshymne RV X 72 und Mārtāṇḍa”. Karl Hoffmann-Friedrich Rückert-Gedenkkolloquium, Friedrich-Alexander-Universität Erlangen-Nürnberg, 24-25.11.2016.

② Toshifumi Gotō “Zum Weiterleben von uridg. **h*₁er, **h*₂er, **h*₃er im Indoiranischen”. Sanskrit und die Sprachrevolution – 200 Jahre Indogermanen

nistik, Berlin–Jena, 17–20.5.2016.

③ Toshifumi Gotō “Bergung des gesunkenen Sonnenlichts im Rigveda und Avesta”. International Conference “To the Sources of the Indo-Iranian Liturgies”, Liège, June 9–10 2016.

④ Toshifumi Gotō “From Veda to Buddha –Gotama Buddha and the preceding Vedic world view–”. Rediscovering Gotama. International Buddhist Conference, Bangkok, November 22–29 2017.

(参考: 講演 3 件)

① 後藤敏文 「「業と輪廻」理論の背景 –ヴェーダから仏教へ–」 静岡市真勝寺 2017 年 12 月 17 日.

② 後藤敏文 「インド古典文学・仏典に見るサラソウジュ」 民族自然誌研究会第 78 回例会「サラソウジュ林文化の諸相」, 京都(龍谷大学大宮キャンパス) 2015 年 4 月 25 日.

③ 後藤敏文 「沈む太陽と死者の世界 –インド最古の讃歌集『リグヴェーダ』より–」 宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所公開講演会, 仙台 2015 年 1 月 19 日, 国際仏教学大学院大学公開講座, 東京 2015 年 5 月 9 日.

[図書] (計 8 件)

① Toshifumi Gotō “The Morphology of Indic (old Indo-Aryan)”. *Handbooks of Linguistics and Communication Science*, 41,1, *Handbooks of Comparative and Historical Indo-European Linguistics*, ed. by J. Klein, B. Joseph, M. Fritz, De Gruyter Mouton 2017 (10 月), pp. 344–377.

② Toshifumi Gotō “RV X 135: The Boy and the Chariot”, *Miscellanea Indogermanica*. Festschrift für José Luis García Ramón zum 65. Geburtstag, herausgegeben von I. Hajnal, D. Kölligan, K. Zipser, Innsbrucker Beiträge zur Sprachwissenschaft, Innsbruck 2017 (8 月), pp.237–244.

③ Toshifumi Gotō “*vi-leś/liś* und die Verstauchung des Opfers”, *Tvet Tat Satyam*. Studies in

Honor of Jared S. Klein on the Occasion of His Seventieth Birthday, edited by A. M. Byrd, J. DeLisi, M. Wenthe, Ann Arbor: Beech Stave Press, 2016, pp.76–85.

④ Toshifumi Gotō “A survey of new evidence as to the formation of the Yajurveda and Brāhmaṇa texts. –With special reference to recent Vedic studies in Japan–, *Vedic Śākhās. Past, Present, Future*. Proceedings of the Fifth International Vedic Workshop Bucharest 2011, ed. by J. E. M. Houben, J. Rotaru & M. Witzel, Cambridge, Mass., 2016, pp.543–558.

⑤ 後藤敏文 「*prathamām* 「たった今」」, 奥田聖應先生頌寿記念『インド学仏教学論集』, 佼成出版社 2014, pp.149–159.

⑥ 後藤敏文: 「業と輪廻の思想」 『インド文化事典』, 杉本良男ほか編, 丸善出版, 2018 年 1 月, pp.200–201.

⑦ 後藤敏文: 「第 4 章 インド・イランの宗教」 『宗教の誕生 宗教の起源・古代の宗教』, 宗教の歴史 1, 月本昭男編, 山川出版社, 2017 年 8 月 30 日, pp. 210–249.

⑧ 後藤敏文: 篠田知和基・丸山顯徳編『世界神話伝承大事典』 勉誠社 2016, インド関係全般 (井上信生ほかと共著) およびイランの項目の一部.

[その他]
ホームページ等
<https://gototoshifumi.jimdo.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後藤 敏文 (GOTO, Toshifumi)

国際仏教学大学院大学・仏教学研究科・教授

研究者番号 : 40215497